

有栖川宮記念公園は、都心にあるとは思えない程ひっそりとした空間だ。周辺には大使館が多く並ぶ為か、風景はまるつきり日本であるのにも関わらず、行き交う人々はインターナショナル色が強い。天気の良い昼頃には足を伸ばして散歩に勤しむ姿や、ピクニック気分でテイクアウトしたランチを頬張る姿が見える。

フランシスの城『フルールドウリス』は、その和やかな公園から少し離れた場所にあつた。地下鉄から上がり、公園へ向かうメイン通りから、一本ズレた道である。そういう意味では立地的に恵まれてはいないのだが、遠回りになろうとも足を伸ばしてくれる客が多い為、なかなか繁盛していると言えた。朝は十時から、夜の十時まで。店員は自分一人しかいない。扱うのは、オーソドックスなパン類とキッシュ、それからケーキだ。パン屋と称するにはパンの種類が少なく、ケーキ屋を称するにはケーキの種類も多くはない。店内には小さなラウンドテーブルが二つに、それぞれに椅子が二脚。イートインも可能だが、ドリンクはペリエと紅茶とコーヒーのみ。冬場にはそれに、日替わりのスープが追加される。

やりたいことを集めて並べたらこうなりました、という典型的な中途半端さだが、そういう店が一位あつたつて許されるだろう、とフランシスは樂觀的だ。店主が血眼になつてやっている店よりも、多少完璧さから遠くても楽しんで営んでいる店の方が、断然雰囲気も良いし、くつろげるものだ。

客も心得たもので、昨日売っていた商品が今日並べられていなくても騒いだりはしない。『無いの？』『ごめんなー、今日は作らなかつた』『そっかー』で終わりである。食べたかつたのにー、と愚痴を零されても、それは何処かリクエストじみていて、じゃあ次は用意して待つてるよ、と答えるのが常だ。ついでとばかりにウインクの一つも飛ばせば、女性客は困つたように微笑み、男性客は苦笑いか、げんなりとした反応を返してくる。ハイハイとあしらわれると悪戯心がむくむくと擡げて来て、結果、ちよつとした漫才を披露する羽目になり、偶然居合わせた他の客に笑われたりも良くある話だ。

夜十時までの営業は、パンやケーキを扱う店にしては長い方だろう。古い街に棲む店は閉店が早い。特にオフィス街はその傾向が強いものだ。食いつぱ